



Title	<書評>E. V. タルレ 「クリミヤ戦争」
Author(s)	江口, 朴郎
Citation	スラヴ研究, 1, 125-129
Issue Date	1957
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/4928
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112869.pdf



[Instructions for use](#)

エ・ヴェ・タルレ「クリミア戦争」

E.V. Tarle, Krymskaia voina, Moskva-Leningrad, 1950

江 口 朴 郎

最近のソヴェット・ロシアの史学界の動向には他の国の史学界の動向と比較した場合に考えられるいくつかの特異な点があるように思われる。現在のソヴェット史学の示している問題点は、たしかに他の国、たとえばフランス、イギリス、あるいはアメリカなどの史学界の動向とは違った特徴をもっているのではないかと感ぜられる。

昨年、ソヴェットからジューコフ、中国から郭沫若らの歴史家の来日があり、わが国の史学者達との間に懇談が行われたのであるが、そのさいにも、例えばマルクス主義的という本来の立場においては一致するにもかかわらず、いろいろな問題観の違い、あるいは研究の方向の差が確認され、そうしたところに多くの問題が出てくるように思われた。一例をあげれば、日本では奴隷制が非常におそくまであったと考えられ、ロシア史においても奴隷制の存在が考えられているが、ソヴェット史学はわれわれと非常に違った考え方をしている。このような現在のソヴェット史学のいきかたには、恐らく長所もあれば短所もあると思われるが、とにかく、他の国のそれとは違った問題点があるのである。そしてこれは、当面する問題が、ソヴェットの社会と日本の場合とで違っており、それぞれの歴史上の差というものが影響していることによるように考えられる。

われわれロシア史研究者の間でも最近定期的な研究会がもたれるようになったが、これもどちらかといえば最近のソヴェットの学界の紹介に止まって、その成果を現在との関連においてとらえるということについては、まだ多くの不十分な点を残しているのではないかと考えられる。

以下に紹介するタルレの「クリミア戦争」も、それ自体すこぶる浩瀚なもので、外交史的にも、軍事史的にも、非常に綿密な研究ではあるが、他面やはりそのなかにソヴェット史学界の動向の問題がうかがわれるように思われるので、そうした点を中心に、大ざっぱ

に検討してみたいと考える。

まずはじめに著者の業績を大略紹介すると、彼は外国人にもよく知られた歴史学者で、その著名な業績としては先づアンシャン・レジームのフランスの農村工業史があげられる (Tarlé, Eng., *L'industrie dans les campagnes en France á la fin l'ancien régime*, Paris, 1910)。この研究のなかにはいろいろ注目すべき点があり、現在のフランス史研究においても非常に重要視されている。これに次いで大陸封鎖をイタリアの経済状態との関連でとらえた業績があり (*Le blocus continental et le royaume d'Italie. La situation économique d'Italie sous Napoléon 1er*, Paris, 1928)。これもフランス革命の、ナポレオン戦争のヨーロッパへの影響、大ざっぱに言えば、資本主義的な戦争としてのナポレオン戦争の意義を指摘しているという点が、ヨーロッパ史学界の問題として、やはり注目すべき論点であったと考えられる。それに、この場合大陸封鎖のイタリアへの影響を明かにした点も、ヨーロッパの民族問題が一つの経済的問題に発展する段階へ関連をもつ問題として、やはり重要な、興味ある問題を取りあげていると考えられる。ナポレオンをフランス革命の完遂者であるという面からみる考え方に対して、ナポレオンの反動的な側面について批判しているという点で特徴を現していると考えられる。ナポレオン戦争の一つの扱い方として、1920年代当時の業績としては注目すべきものではないかと考える所以である。それから「1812年の祖国戦争」(Tarle, E. V. ред. *Отечественная война 1812 г., сборник материалов и документов*, М.-Л., 1941)があり、これは資料を集積したものであるが、フランス革命からナポレオン戦争の時代にたいしての問題の出し方が、とくにロシア的とでもいうか、とにかく新し扱い方をしているように感ぜられる。それから、1951年の「ジェルミナルとプレーリアル」(*Жерминаль и преириаль*)があるが、これはフランス革命後の、1795

年4月1日のジェルミナル事件と言われる労働者の蜂起、さらに5月20日のプレーリアル事件等の意義を積極的に認め、フランス革命のときにブルジョアジーが指導力をもっていた段階と違った新しい革命の段階として、この段階の意義を強調する見解を發表している。そして彼は昨年1月6日、亡くなっている。

以上がタルレの従前の業績の大略であるが、このタルレが1950年に世に出したのが、浩瀚な「クリミア戦争」で、これも一応注目に価するものであると考えられる。第一に、普通われわれがクリミア戦争というものをも問題をする場合、イギリス、フランスの側からロシアにたいする側面が非常に強調される。しかし、これは別にクリミア戦争だけに限ったことではなく、ヨーロッパにおける戦争、あるいはその他の問題などすべてにそうした傾向があるのであるが、そう言った傾向に対立する意味からもこの労作には新しい問題点がかがわれる。

クリミア戦争は1853年から56年まで4カ年の長期間にわたり、その戦争は、普通はドナウ沿岸からクリミア半島におよぶと言うことになっているが、その点、彼はそれらの地域だけでなく、バルト海からカムチャッカにまでおよぶ地域の問題として扱っている。そしてこれは、このように広い地域にわたる戦争に堪えたロシアの戦力の問題といった点に関係がある、と彼はいつている。

こういう戦争は、当然、その当時の国際政治全体のなかで取扱われなければならない。普通考えられる帝政ロシアのことだけではなしに、ポーランド、セルビア、ルーマニア、ブルガリア等の諸国に、とくにセルビアのようなスラヴのなかでも比較的遅れた部分の動きが、この戦争によってどういう影響をうけ、どういう風に変化したかを考えなければならない。いわゆる東ヨーロッパの国々は、独立したギリシャ以外は直接外国の支配下にあったために、当時起りつつあった民族的運動に始まって第一次大戦までのあいだに独立のためのいろいろな問題があり、1848年からこの戦争にいたるまでの歴史も、全ヨーロッパの民族的な問題として大きな意味をもっているのではないかと考えられる。そういった意味から、この時期の民族運動の問題と、社会主義との関係という観点から考える問題点もあってよいのではないか。ことに、これは非歴史的な問題の仕方になるかも知れないが、1848年というものだけを採りあげてみると、その時期に当然社会主義と民族主義との関係は、世界的な問題として提起されざ

るをえないことになる。大ざっぱにいうと、1848年以前には客観的には、イギリス、フランスの問題を除いて、あとは全部民族の独立問題であるとも言えるわけで、その時代のヨーロッパ諸国、ドイツ、イタリア、ハンガリアなどから印度、中国までがそうであり、社会主義、あるいはマルクス主義の問題にしても、具体的には民族的な問題との関連のうえに、マルクス主義、あるいは社会主義の運動をいかにして組織していくかという形で問題が起っていると見える。逆にいえば、1848年、ルイ・ナポレオンの新しい国内政治の段階を現しているのと同じような問題が国際政治の上にも現れてきたわけで、48年以後は真正面から民族問題というものを抑圧することは行われえなくなって、ナポレオン三世も国際政治に関連してイタリアのマツチニと取引を行った形跡があるのである。

一方、ロシアにとっても1848年は、スラヴの民族的な自覚というものにたいして、政治のうえにそれらの要求をとりいれ、むしろ、それにセルビアその他の運動をも利用していく、そういう政策上の分岐点を示す時代であったといえる。当然、ロシア内部においても、西欧派とかスラヴ派とかいったものの分裂が考えられるわけであるが、現在の立場からいうと、そこには一つの容観的な、世界政治からのそういった関係というものが考えられる。

私としては、何よりもこういった観点から、この「クリミア戦争」にたいして大きな関心をもっているのであり、だいたいそういった点からみてどういふことを問題にしているかということの概略を述べることにする。

まずはじめに序論であるが、これは、当時のヨーロッパの国際的な政治情勢、フランス、イギリス、イタリアなどの地位、それからロシア内部におけるクリミア戦争との対決の仕方等を概観しているが、とくに思想的な面でどういう問題が現れているかといった点に本書の特色を示していると思われる。

その次は国際政治史的観点からのクリミア戦争の原因、とくにフランスの外交事情、それに軍事史的な事実で、これは普通の外交史的叙述に即して扱っている。はじめトルコの体制に対して、上陸作戦等で、デモンストレーションを行いつつ、一挙にロシア側の問題を解決する。しかも、その一面、ヨーロッパ諸国の反動的な戦争、とくにナポレオン三世の戦争準備の過程が絶えずからみ合っているわけである。そして最後のところで結論として出て来るのは、ロシアの人民は

ロシアの発展にたいして力強い能力を備えていたのだが、ツァーリの政策が、そういうロシア人民の能力を妨げたといった表現である。本書は1950年に出ているので、これには恐らくは、第一次大戦以降そのころにいたるまでのソヴェットの政治動向が非常に関連しているように思われる。それだけに、また逆に、イギリス、フランス、あるいはイタリアの政策にたいする批判というものが、相当はっきりしているのではないかと考えられる。その他の部分では現在のルーマニア地方の戦争の状況、バルチック海その他での戦闘の状況が相当詳細に書かれている。クリミア戦争というものが広大な範囲において行われたことは事実であるが、それをとくに強調すると同時に、この非常に広範囲な戦争にたいしてロシアの払った努力を強調していることも、本書の特徴かと思われる。しかし、そのことは、実は現在の問題意識が必要以上に表現されているのではないかという感がする。

「クリミア戦争」でこの次に来るのは、シノーペの奇襲戦で、これは小アジアの北岸のシノーペ港をロシア艦隊が奇襲してトルコの艦隊を惨敗せしめた戦闘であるが、この戦闘のことが非常に大きく書かれている。これは普通外交史上でも有名な事件であるが、本書ではこの事件について、ロシア海軍の指導者ナヒーモフ提督の軍事能力そのものの問題が非常に強調されている。それからクリミア戦争のなかでは、イギリス、フランスがすでに蒸汽船を軍艦として利用しているのに、ロシアの方は帆船の軍艦だということが強調されている。それは、このような技術的近代化の後れのためにクリミア戦争の経験が、ロシアの農奴解放を容易ならしめたというのが一般の考え方であるが、ここでは、むしろ、ロシアの戦闘力の根源というものが強調されている。つまり、シノーペやドナウでも戦闘があるが、そこにおける戦闘力を大きく評価し、しかも、ロシア側の堡壘の築き方というものを強調している。その点から言えば、見えすいた感じもするほど、ロシア人の生産能力を強調しているわけである。これはクリミア戦争に限らず、ソヴェット学界一般の傾向である。時代の如何を問わず、生産力というか、国民の能力というか、そういうものが、他のいずれの国にも劣っていないということを強調する傾向がうかがえるのである。そしてそういうものが軍事的な面でよく現れているわけである。もっとも、そのような問題観が、一面においては、従来みられなかった新しい面を出していると思う。それで、結局このクリミア戦争観

によると、ロシア自身の戦争の能力、そういうものが強調されると考えられるわけである。

クリミア戦争について一つ問題になるのは、この戦争のなかでオーストリアが矛盾した地位にあったという点である。純軍事的な面から考えても、この戦争の初期には、フランスとイギリスは海軍でダーダネルス海峡を封鎖しているが、これはだいたい海峡外に待機するという程度であり、イギリス、フランスの陸軍が現在のブルガリアのヴァルナに根拠地をおいても、実際には、戦争そのものはトルコ人にやらせるわけで、トルコとの関係でバルカンに駐屯した場合も、客観的に言えば、バルカンを抑えつつ形勢観望している段階である。それにたいしてオーストリアは、一面ではロシアとの対立面を生じているけれども、戦争に参加すれば、オーストリアは独力で戦わなければならないことになるので、ロシアとの勢力関係上積極的にロシアと戦いえないことになる。それと同時に、それにもかかわらずこの時期に、オーストリアにとって一つの問題が出てきている。それは、やはりこの時期に明かになったことと思うのであるが、オーストリアとしては、48年あたりまではハンガリアの独立運動を抑圧する場合にロシアの力で弾圧して来た、といった条件があったのに、これが最早考えられなくなっている。つまり、オーストリアとロシアとの関係が新しい微妙な段階に入らざるをえない時期にあったといえる。恐らく、この点はバルカン諸民族の動きと照しあわせて、そのときの状況は研究に値する問題だと思うが、ここでは一般にそういう問題があるということが強調されている程度である。

しかも、そういうような1854年の問題にたいして、タルレは、結局どういう表現をしているかという点、オーストリアが、そこでイギリス、フランスと妥協して、ロシアから離れていくような態度をとったことは、オーストリア外交の失敗であって、この後ナポレオン三世に乗ぜられる原因になったというふうに表示している。それにもかかわらず、本書の中にはロシア側からではなく、つまり、被圧迫民族としてのスラヴの側から考えらるべき問題点や素材が非常に多いわけで、これらの点を検討すれば、スラヴ民族の諸問題を考えるに当たっての多くの手懸りを提供しているわけである。だいたい、この54年の夏までは、戦争が行き止まって、退屈な戦争などと言われており、何のためにバルカンに駐屯しているのかわからないような段階である。それが1854年9月から、クリミア上陸が

行われて、そこで最後の惨澹たる戦争が行われることになる。

一般的に、戦争の記述そのものについては、本書は、先にも述べたように、むしろ、ロシア人自身の勇敢な抵抗を強調する傾向を示している。それから、ロシアの生産上の技術的な面の立ち遅れを、単に遅れているという風には扱わないように見られるのも一つの特徴ではないかと考えられる。一般的にいうと、そういう意味では、われわれとしては非常に新味を感じない点が多いわけであるが、スラヴ的な世界をロシア中心に扱わないで、むしろバルカンの問題というか、現在の東ヨーロッパの歴史的な条件というものが、もっと主体的なものとして大きく取扱われるべきではないかという気がする。

事実、ギリシャにしても、ブルガリアにしても革命の問題が起っている。セルビアもこの時期に、ナポレオン戦争時代の農民運動から出て列強の勢力と結びつくけれども、それが1858年にはフランスの勢力と入れかわるのであって、そしてそのバルカンにたいする非常に重要な拠点でもあったわけである。だいたい、これは単にセルビアだけに限ったことではないが、バルカンの地域一帯は、他からみて社会の構成的な面が非常に遅れた地域であった。そしてそれが反動的に組織されるか、組織されないかという分岐点に立っていた。クリミア戦争の最後のパリ会議のときに、セルビア、ルーマニアから独立の要求が提出されたのは当然であるが、とくに重要なのはモンテネグロの独立要求で、モンテネグロというところが、はじめてパリ会議に出て来て独立を主張するわけである。それがどういうことを主張したかということ、トルコの側からいえば、14世紀あるいは15世紀以来、バルカンはトルコの支配下にあるわけであるが、モンテネグロはいままで一度もトルコに支配されたことはないと主張している。だいたい、このモンテネグロというところは、バルカンがトルコに征服された際にスラヴ系の民族が逃げこんだ地域で、とても小さな面積ではあるが山岳地帯であるために、トルコ側もどうしても攻められず、ついにそのままにしておいたところである。それで、モンテネグロ側は、われわれはトルコに征服されたこともなければ、その支配をうけたこともないことを理由にこのパリ会議で独立を主張し、ついに最後のベルリン会議において独立を認められる。そしてそんなことから、モンテネグロには、とにかく大使館あるいは公使館といったようなものがずらりとならんでい

るけれども、謂わば一つの軍事的拠点みたいなところである。そういうようなことから、バルカン、現在の東ヨーロッパは、歴史的な条件がいろいろな意味で複雑だということがいえる。したがって、東ヨーロッパの民族問題については、もう少し、いままでとは違った方法で検討を加える必要があるのではないかと考えられ、クリミア戦争の時期の重要な時点にあたっていると考えられるのである。

またトルコは回教徒だが、その具体的な歴史はどうであったのかという問題もある。キリスト教を圧迫して、列国のトルコに対する「内政改革」の要求の対象となる回教徒自身はヨーロッパ人であった。とにかく東ヨーロッパ自体の問題というものは、クリミア戦争を研究するにあたって、もっと掘りさげられてよいだろうと思うのが、一つの問題点である。

それから、既に述べたように、タルレのクリミア戦争観というものは、基本的にはクリミア戦争に関連してロシア民族の能力を誇示しようとすることに結局はなると思う。それで、妙なことには、ナポレオン三世もロシアに追随せざるをえなくなったとか、1856年のパリ会議でロシアは黒海周辺の封鎖権を失ったが、1878年セルビアを独立せしめ、このことは積極的な意味をもつとといったように書かれている。であるから、その半面では、その時期のイギリス、フランスの政策というものが、普通考えられるよりも反動的に表現されている。そして、オーストリアが、イギリス、フランスなどと妥協して、ロシアに最後通牒を送らざるをえなかったのは、オーストリアの外交の大きな失敗だったというようなことが書かれている。

それから、このクリミア戦争にあたって、イタリアのサルジニアが1万何千かの軍隊を戦線に送っているが、そのことは、その時期において独立統一を達成せざるをえないイタリアの政策の一つとして、当然問題にしてよいことである。サルジニアがイタリアを統一するという場合に、民衆を背景としてその目的にむかって進むという形をとらないで、イギリス、フランスの力に依存して統一を達成しようとして、はるかにクリミアに1万以上の軍隊を派遣し、イタリアとトルコがつながるというところに、当時の国際政治の条件の下における民族的統一の問題が含まれているが、そういう面も、この本では正しくとりあげられている。

だいたい、大ざっぱにいうと、以上に述べたように、本書は、ソヴェットの側からの国民的課題を積極的に強調する、といったことになっている。従来、ク

リミア戦争についての研究として知られている欧米側の文献は、いずれもイギリス、フランスの側からのロシアにたいする批判という形になっているわけであるから、タルレの本が当然新しい立場をもっている所以にもなるわけである。それで、現在のわれわれから言えば、恐らく、ここにあらわれる或る民族主義的傾向は最近のソヴェットの内部としても問題があるのではないかと思われるが、たしかに、クリミア戦争というものを問題にする場合、これを国際問題、広い地域の問題として考えなければならぬことは、当然認められてよいのではなからうかと思われるのである。

それから、ロシア人の発展の段階、そういったことの強調、これも必要以上に現れているということがいえるのではないかと思われる。はじめの序文のなかで、クリミア戦争の敗戦そのものは、ロシア人の愛国心を挫折させるようなことはなかったというふうに表現されているが、いずれにせよ、だいたいにおいて、そういう見方をとっているように思われる。

それから、フランスを中心に、西ヨーロッパの情勢を批判しているが、そのなかに積極的にスラヴ民族の自覚というものの強調が部分的に出ているが、そういうところにも問題点がある。

またクリミア戦争にたいして、その戦域は単にクリミア半島だけに止まらないで、シベリアあたりにまで

および、バルト海も戦域になったとする点は既に繰返した通りであるが、そのなかにシベリアにいる、汎スラヴ的なアクサコフ、その他の思想的政治的な動きが散見される。汎スラヴ主義への展望については必ずしも明確にされていないのであるが、もともと本書は政治外交的な記述が主であるから、そういう素材の少い問題については断片的な記述しかあらわれていないように考えられる。

全体からみて、1850年から60年代になって、ロシアが主体となったスラヴ人の会議が開かれるまでの、スラヴ世界の動向というものについては、恐らく、今後更にいろいろな意味で検討されなければならない問題があるのではないかと思われる。たとえば、この時期の民族主義の問題とか、社会主義の問題とか、そう言った基本的な問題にしても、理論上では一応社会主義の問題が提起されてはいるが、現実にはそれほど分化していないのではないかと思われるわけである。それだから、マルクス主義にしても、19世紀の終りから20世紀のはじめにかけて、そういう歴史的な条件というものの把握、国際的な情勢の把握、民族問題の把握、そういう面が非常に弱くなっているのではないかと思われる。本書もまたそのような問題を今後に残している。